

# 論文

## マギーにみるヒロインの意味

岡 田 慶 子

### 1. 序 論

I walked in a desert.

And I cried :

“Ah, God, take me from this place!”

A voice said : “It is no desert.”

I cried : “Well, but—

The sand, the heat, the vacant horizon.”

A voice said : “It is no desert.” (42) (1)

アメリカ自然主義作家の代表と見做される Stephen Crane (1871～1900) は、その最初の詩集、The Black Riders and Other Lines (1895)の中で、上記のような詩を発表している。彼によれば、我々人間の生息している現実の社会は、正に砂漠 (a desert) であり、砂と熱との苛酷な世界なのだ。そんな環境の中でも人間は夢を追求するが、それは、ただ空虚な地平線 (the vacant horizon) といった、甚だ曖昧模糊とした存在にすぎない。絶望した人間は、この地から連れ出してくれるよう、神に嘆願するが、無慈悲な神はただ無視するばかりである——

クレインは、この不毛な現実の世界の中で夢を追い求める人間の空しい姿を『マギー』 (Maggie, 1893) という作品の中で、象徴的に描き出している。

南北戦争を機に、アメリカには産業革命の嵐が吹き荒れ、1860～1910年までの50年間に急速な工業化が遂行された。物質的繁栄の副産物として、ニュ

ーヨーク、シカゴといった大都会には、発展から取り残された人々の蠢めくスラム街が誕生した。彼によれば、現実社会の中の人間は、獣のごとき生き物(a creature, naked bestial)で、地面に蹲り自らの手で己の心臓を食む存在なのだ。その心臓は己の罪ゆえにひどく苦いが、人間はそれが自身の心臓であるという理由で、そのどうしようもなく苦い心臓を慈しむ罪深い存在である。(2) スラム街は、クレインの目を通して見える、罪深い人間が群れをなす、砂漠のような現実社会が、極端な形態で現われる格好の設定となった。

彼はマンハッタンの下町のバワリー地区をその舞台として選び出し、獣のような人間たちを登場させ、物語の展開を計った。およそ人間の住み得る場所とは言い難いこの舞台を克明に描き出し、それぞれ夢を抱き戦い続ける人間達の姿を追い求める。本稿では、作品の中の代表的な人物の戦いと、その夢を考察し、その意味について言及したい。

## 2. Jimmie の夢

A very little boy stood upon a heap of gravel for the honor of Rum Alley. He was throwing stones at howling urchins from Devil's Row, who were circling madly about the heap and pelting at him. / His infantile countenance was livid with fury. His small body was writhing in the delivery of great, crimson oaths. (3)

これが Maggie の冒頭部分である。このように作品は、スラム街の子供達の乱闘場面から始まり、一章全体にその経過が叙述されている。その意図を、Knapp は彼の論文の中で、作品全体を支配している闘争と危険(struggle and danger)とをここで代表させている、と述べ、さらに Rum Alley と Devil's Row のライバル同志の闘争を単なる生存競争の比喩としてだけではなく、より大きな善と悪という、社会は元より個人の内にある、アンタゴニズムの隠喩であるとまで述べている。(・・・they are also metaphors for a larger antagonism : the conflict between good and evil that exists within each individual as well as within society and the universe.) (4)

ジミーは子供の頃から、『ある漠然とした闘士か、ある種の崇高なライセンスを所有する血気盛んな男』(one who aimed to be some vague soldier, or a man of blood with a sort of sublime license)になることを目指していた。スラム街で培われた不敵な人生観が彼を支配し、世間に対しての尊敬の念など少しも持ち合わせてはいない青年として描かれている。彼にとって世間の大部分の人間は、何とか彼を騙そうと狙っているだけの卑劣な奴等で、そういう集団から自分の身を守るためには、機会さえあれば喧嘩を仕掛け、トラブルに巻き込まれる羽目になる。そうした過程の中で彼は増々虐げられ、孤立していく。その孤立状態の中に、彼はある明確な崇高さを見出すのだ。(a down-trodden position that had a private but distinct element of grandeur in its isolation)

弱肉強食の世界の中で勇敢な男として生き延びるという夢を持つ彼だが、殺伐とした中にも、彼には多分に詩的雰囲気漂っている。それは、第四章の終わりで月の素晴らしさを言及する彼の言葉に端的に現わされる。(“Der moon looks like hell, don't it?”)

また、妹マギーに対しても、ふとした優しさを垣間見せることがある。一瞬でも月の美しさに目を向けることが出来るように、彼には真実への洞察力の片鱗が窺える。自分が社会的に高い水準にいることを示すように、墮落したマギーを公然と非難してはみたものの、彼女がいかに生きるかという分別を身に付けていさえすれば、もっとより良い身の振り方があったのではないか、という結論に達しかかることもあった。ただ彼は、その結論を性急に葬り去ってしまい、それ以上深く考えることはないのだ。

### 3. Maggie の夢

The girl, Maggie, blossomed in a mud puddle. She grew to be a most rare and wonderful production of a tenement district, a pretty girl.

マギーは、このように第五章の初めになって漸くその存在を明確に現わしてくる。以前にも彼女の姿は言及されてはいるが、『ぼろ服の少女』(a small ragged girl)といった非常に影の薄いものにすぎない。ここに至り、彼女の存在は作者の詩の中の次の天使の言葉に象徴されているように思われる。

“You should live like a flower,  
Holding malice like a puppy,  
Waging war like a lambkin.” (54)

マギーは泥沼の中に咲いた花のような存在であると記述されている。また、せいぜい弟の腕を無理に引っ張り転倒させながらも、さらにその腕を引っ張るという程度の悪意を持ち合わせ、家族の他の人間と比較すると、実に消極的な抵抗のみをしている存在として描かれる。彼女を『追われる虎の子のように』(like a small pursued tigress)であると形容しているのも注目に値するだろう。

動物的な環境の中で、母や兄の威力に圧倒され続けた彼女も、年頃になる。女は売春婦になるか、単調な作業の工場にでも勤めるかしか、生き延びる道はない。家の現実、無秩序と不潔さの中で毒づく母の姿を見ることによって、彼女自身に迫ってくるし、勤めに出たカラー・カフス工場の現実、その暑く息苦しい、騒音と悪臭の中で、機械と同化してしまったかと思われる(mere mechanical contrivances)年配の疲労の極みの女達を見ることにより、目前に迫ってくる。こうした状況の中で、紳士然としたピートに、マギーは夢を求めるのだ。

他の人間の夢が現実的なものであるのに対して、マギーの夢は対称的に、“愛”という曖昧なものだ。Her dim thoughts were often searching for far away lands where, as God says, the little hills sing together in the morning. Under the trees of her dream-gardens there had always walked a lover. (作者傍線) (p. 19)

この巡り着けない夢という発想は、クレインの詩の中で繰り返し取り上げられている。例えば、

There was set before me a mighty hill,  
And long days I climbed  
Through regions of snow.  
When I had before me the summit-view,  
It seemed that my labor  
Had been to see gardens  
Lying at impossible distances. (26)

A man saw a ball of gold in the sky ;  
He climbed for it,  
And eventually he achieved it ----  
It was clay. (35)

などが挙げられよう。

クレインの作品を考察する上で、彼の詩が大いに参考となる理由は、彼自身が手紙の中で次のように述べていることに由来する。

Personally, I like my little book of poems, "The Black Riders," better than I do "The Red Badge of Courage." The reason is, I suppose, that the former is the more ambitious effort. In it I aim to give my ideas of life as a whole, so far as I know it, and the latter is a mere episode, ---- an amplification. (5) (作者傍線)

要するに、彼の詩の中には、彼の人生観が凝縮されていると考えられるからだ。

詩(26)に言及される 'gardens' は、マギーの 'dream-gardens' を彷彿させるし、後者の詩の、土塊になってしまう黄金の球は、マギーの目に映るピートを、ある種の輝きに包まれた、『黄金の太陽のような』存在 (like a golden sun) と描写したことを喚起させる。

また、ジミーも果物のなる所 ('gardens' を指しているといつてよい) が、望めないほど高い所にあると考えて不機嫌になるという場面が書き加えられ

ている。(Jimmie was sullen with thoughts of a hopeless altitude where grew fruit.)

さらに、クレインは詩の中で、慈愛の神が死んでしまい、この世が暗黒の世界と化し、怪物に支配されんばかりになった時、それに対抗出来るのは、“愛”であると述べている。

But of all sadness this was sad, ——  
A woman's arms tried to shield  
The head of a sleeping man  
From the jaws of the final beast. (67)

マギーにとって、この世界は『困苦と侮辱』(hardships and insults)に満ちた暗黒の世界で、彼女にとってのピートは、死の天使に心臓を掴まれても意に介さないと思われる、公然と世界に反抗している、賛美に値する人物である。

She thought that if the grim angel of death should clutch his heart, Pete would shrug his shoulders and say: “Oh, ev'ryt'ing goes.” (p. 20) この‘the grim angel of death’というイメージには、上記の詩の冒頭部分に目を向ける意味があるだろう。

God lay dead in Heaven ;  
Anglels sang the hymn of the end ;  
Purple winds went moaning,  
Their wings drip-dripping  
With blood  
That fell upon the earth (67) (作者傍線)

マギーにとって、ピートは正に『騎士』(a knight)であり、彼に『黄金に輝く場所』(the golden glitter of the place)に連れて行ってもらうことが、彼女の熱望なのだ。

初めてのデートは、実に暗示的である。ピートが連れて行ってくれる所はあまり輝かしくて、マギーは自分がくすんで見えるのではないかと恐れてい

る。(she was afraid she might appear small and mouse-colored) 母はいつものように罵り声をあげる。ピートが到着した時、マギーはヨレヨレの黒いドレス (a worn black dress) に身を包み、ピートのために精魂こめたカーテンは母の手によって引きずり降ろされ、少しでもより良く見せようとカーテンに結ばれた青いりボンは、踏みにじられた花のよう (like violated flowers) であった。また、ストーブの火は消えていて、外れた蓋からは、灰色の灰 (heaps of sullen grey ashes) が覗かれる。クレインの色彩感覚の妙はよく言及されることだが、この 'mouse-colored', 'grey ashes' の灰色のイメージは、マギーが身を投じることになる、川の色合い (the river appeared a deathly black hue) を連想させる。

#### 4. The Mother

"My home reg'lar livin' hell!... Why do I come an' drin' whisk' here thish way? 'Cause home reg'lar livin' hell!" と、マギー達の父親は酒場で管を巻く。その『生き地獄』の中に蔓っている大柄の女 (a large woman was rampant) が、メアリ・ジョンソン、即ちマギーの女親である。彼女に対する記述には、動物的要素が特に濃く現われている。'massive shoulders' 'the huge arms' 'her immense hands' 'a chieftain-like stride' 'Her eyes glittered' といった、いかにも動物を思わせる外観で、彼女の夫の言葉を借りれば、常に子供を殴っている ("yer allus poundin' a kid"), 飲酒癖のある ("You'd better let up on the bot', ol' woman, or you'll git done." — 『酒は止めた方がいいぜ、さもないといかれちまう』) 母親として、登場する。(Chap. II)

It seems that the world had treated this woman very badly, and she took a deep revenge upon such portions of it as came within her reach. She broke furniture as if she were at last getting her rights.

(p. 26)

自分は不当な扱いを受けていると、嘆き続け、それに対する復讐として、

自分を取り巻く環境の一番手近な、身の回りの家具を破壊し続ける。頻繁に裁判沙汰を起こし、その際には、口達者に弁明、説明をし、謝罪を申し入れたり、懇願したり、と世間を渡り歩く手練手管はお手のもの、実に逞しく生き抜いている。

それでいて、夫の生前、派手な喧嘩の後、涙を流しながら、『可哀想なお母さん』（“poor mother”）と自分の悲劇を自ら託ち、哀れみを買おうとする基本姿勢が描かれている。酒に溺れるのも、自分ではどうすることも出来ない醜悪な環境のせいで、自分は善良な母親であるにも拘らず、極貧の中にあり、夫と赤ん坊は早死してしまうし、娘（マギー）は不名誉な墮落の道を巡る。想像力の欠如した狭量な母親には、自分の身の回りに起こることが、自分の思惑からあまりに掛け離れ、理解し難い、許し得ぬことで、それに対して彼女は全身で戦っているのだ。

The mother raised lamenting eyes to the ceiling. / “She’s deh devil’s own chil’, Jimmie,” she whispered. “Ah, who would t’ink such a bad girl could grow up in our fambly, Jimmie, me son. Many deh hour I’ve spent in talk wid dat girl an’ tol’ her if she ever went on deh streets I’d see her damned. An’ after all her bringin’ up an’ what I tol’ her and talked wid her, she goes teh deh bad, like a duck teh water.”

（p. 32）

彼女にとって、マギーの墮落はあくまで正当な母親である自分に対する、信じ難い裏切りであり、回りの憐憫を買う格好の種となる。そして、上記の息子ジミーへの訴えの最後の一文（作者傍線）は、やはり暗示的である。その暗示された娘の劇的な入水の事実は、彼女にとって都合のよい飲酒の口実となりそれは留る所を知らず、まるで42人も墮落した娘を持つ母親であるかのように、自分自身を正当化し、現実的な存在として主張し続ける。以上のようにこの母親の存在は、マギーと両極端のそれとして生々しく描き出されている。



## 5. Pete and Nellie

マギーを墮落させるピートは、冒頭の Rum Alley と Devil's Row の乱闘の際に、16才にして既に、典型的な大人に見られるような冷笑を浮べた、高慢な若者として登場する。彼は自分の手中に勝利を握んだとでもいうような様子 (swinging his shoulders in a manner which denoted that he held victory in his fists) である。

ピートは、ジョンソン家の人々とは明らかに違う、小綺麗な外見をした人物だ。マギーの見つめる彼は、髪はオイルでなでつけ、口髭を生やし、縁取りの付いたダブルの上着に赤いネクタイ、チェックのズボンにエナメル靴というシャレ者である。

His mannerism stamped him as a man who had a correct sense of his personal superiority. There was valor and contempt for circumstances in the glance of his eye. He waved his hands like a man of the world who dismisses religion and philosophy, and says "Fudge". He had certainly seen everything and with each curl of his lip, he declared that it amounted to nothing. (p p. 17-18)

こんなピートに、マギーは魅了されるのだが、ピートの描写には、作者の皮肉が至る所に感じられる。ピートは明らかに傲慢な人間の典型として描かれているが、クレインが最も嫌悪感を抱くのが、この傲慢な人間なのである。彼の詩の中に次のようなものがある。

"Think as I think," said a man,  
"Or you are abominably wicked ;  
You are a toad."

And after I had thought of it,  
I said, "I will, then, be a toad." (47)

傲慢な人間を肯定し、同調する位なら、蟾蛙にでもなった方がまし、と言いつける作者である。劇場での高慢な目で舞台を見つめるピートの描写 (regarded

with eyes of superiority the scene before them)にも著しくアイロニーが込められている。非常に上品で親切な (extremely gracious and attentive) 教養豊かな紳士の配慮 (the consideration of a cultured gentleman who knew what was due) を持ち合わせていると書かれているのだ。マギーの目を通して見たピートの理想的な姿を断定的に肯定して描写することで、読者は、それに比例してピートへの不信感を高めることになる。

ネリーは、ピートにマギーを捨てるきっかけを作らせる女として登場する。ピートの派手な服装に調和する、恰好の良い服装に身を包み、既に墮落しているが、世間を立派に生抜いていける女の典型として登場し、マギーとの好対称として描かれている。

## 6. 結 論

マギーという作品を一口に言えば、どうすることも出来ない環境の元で破壊していく一人の女性の過程を描いた悲劇、ということになるだろうが、その背後には、語り尽せない、幾つもの意味が秘められている。

今回の論文の目的は、作品におけるマギーの存在の意味を追求することにあった。スラム街での現実を扱った作品のヒロインにしては、マギーはあまりにも希薄で曖昧な存在として扱われている。まるで、その存在すら疑われる節さえある。

E. Solomon も、次のように述べている。Maggie is totally submissive and the object of stares, as if she were not a person, but a thing. ... The most delicate aspect of Crane's achievement in the novel is this facelessness of his heroine that at once makes his point about her victimization and allows him to crush her pitilessly without falling into sentiment or bathos. The ironic mode prevails. (6) (作者傍線)

マギーの死の描写も実に暗示的なものだし、ピートとのデート中、ネリーと彼が出会う場面でも、まるでマギーはその場に存在しないかのようなのである。要するに、作者は故意にマギーを目に見えない存在として描いているのだ。

(for Crane's purposes she is, metaphorically invisible) (7) そのため、マギーの存在を重厚に描写した時に生じる、物語の悲劇性が巧みに薄れ、マギーの存在は象徴的なものとなり、読者の心の中に絶妙な存在感を高める効果が生まれる。その象徴的なマギーの存在を通して、作者は何を訴えたかったのであろうか。

導入部でも示唆したように、作者は極端な形の現実世界を提示し、その中で夢を求める人間の哀しく愛しい姿を、普遍的に描き出したのではないだろうか。スラム街の人々が生々しく存在感を持って描かれている世界の中で、“愛”という、いつの世にも頻繁に取り沙汰されるが、一向に掴み得ない対象を手にしようとする、曖昧なマギーという存在から、現実感を根底から消去することにより、曖昧な意図—人間の夢という無形のものに、明確な存在感を与えたのだ。

その普遍性は、殺伐とした現実世界の中で、何か描象的な概念に心を注ごうとする人間の姿、例えば作者が詩の中で再三述べているように、真理を求め極めようとする作者自身の姿、閉鎖的なヨーロッパ社会から夢を求めて、アメリカという国へと渡り、自由と平等のスローガンを掲げ、がむしゃらに建国しつつ、フロンティア精神の中から生まれたアメリカの夢が、空虚で苛酷な現実の中に崩れ去りつつある姿にまで、浸透して行くと思われる。

最後に、掴み得ない曖昧な対象を追い求める、マギーのイメージを連想させる作者の詩を引用し、論文の結びとしたい。

There was, before me,  
Mile upon mile  
Of snow, ice, burning sand.  
And yet I could look beyond all this,  
To a place of infinite beauty ;  
And I could see the loveliness of her  
Who walked in the shade of the trees.  
When I gazed,

All was lost  
But this place of beauty and her.  
When I gazed,  
And in my gazing, desired,  
Then came again  
Mile upon mile,  
Of snow, ice, burning sand. (21)

(私の前に／何マイルも何マイルも／雪と氷と燃えるような砂が見えた／  
それでもさらにその向うに／限りなく美しい場所までが見えた／それと、  
木陰を歩く／美しい女性も見えた／私が見つめると／この美しい場所と  
女性以外は／全て消えてしまった／私が見つめ続けると／見つめながら、  
その二つのものを望むと／また再び／何マイルも何マイルも／雪と氷と  
燃えるような砂が姿を現わしたのだった)

## Notes

- (1) Joseph Katz, ed., The Complete Poems of Stephen Crane (Cornell University Press, 1978), p.45  
以下詩の引用は同書より行ない、括弧内は詩の番号である。
- (2) Ibid., p.5
- (3) Text は Thomas A. Gullason, ed., Maggie : A Girl of the Streets (New York, 1979) を使用。
- (4) Bettina L. Knapp, Stephen Crane (New York, 1987), p.44
- (5) Stanley Wertheim and Paul Sorrentino, ed., The Correspondence of Stephen Crane (New York, 1988), p.231
- (6) Gullason, p.206
- (7) Ibid., p.208

## 参考文献

- Marston LaFrance, A Reading of Stephen Crane (Oxford, 1971)
- Milne Holton, Cylinder of Vision, The Fiction and Journalistic Writing of Stephen Crane(Louisiana State University Press, 1972)
- Maurice Bassan, ed., Stephen Crane (New Jersey, 1967)
- Edwin H. Cady, Stephen Crane (College & University Press, 1962)
- Robert Wooster Stallman, Stephen Crane : Stories and Tales (New York, 1955)
- Walter Blairs and others, American Literature (Scott, Foresman, 1974)
- Malcolm Bradbury, The Modern American Novel (Oxford, 1983)
- Brian Lee, American Fiction 1865—1940 (Longman,1987)
- Andrew Hook, American Literature in Context III (New York, 1983)